

視点研究の現状と今後の方向性

大藪正彦

「状況の中」と「状況の外」

出来事を描写する際、日本語では状況の中に話し手の視点を置くことが好まれ、英語では状況の外に話し手の視点を置くことが好まれる (Hinds 1986, 池上 1981, 森田 1998, 菅沼 2002)。

- (1) a. 山が見える
b. I see a/the mountain. — Hinds (1986: 53)

視点, とりわけ「視座」をめぐる議論の高まり

久野 (1978): 「共感」 Cf. ドイツ語では三瓶 (1985)
森田 (1989): 「蛇の視点」と「鳥の視点」
金谷 (2004): 「虫の視点」と「神の視点」

- (2) a. Die Wand näherte sich.
b. Ich näherte mich der Wand.
(3) a. 壁が近づいてきた。
b. 私は壁に近づいていった。

近年の, とりわけ日本における認知言語学: subjective construal と objective construal

本多／上原／池上 (2005) : 「Subjective Construal とは何か」

ある事態の言語化に際して、話し手はまず問題の事態を捉える視座を主体的に定め、その上で、問題の事態のどの部分を言語化に値するものとして採りあげ、どの部分を採りあげないかという選択をこれまた主体的に行う。この際、言語化の対象とされうるさまざまな要素の側にも、それ自体の本性からして、ないしは、文化的に制約される形で、認知的な顕著性 (salience) に関する差がありうるし、またそれ故、言語化の対象としての採りあげられ易さにも差がありうる。しかし、何が選ばれるかは究極的には話し手がそれらの自らにとっての関わりを評価、判断することによって行なうものであるということからするならば、事態把握 (construal) の営みはすべて主体的／主観的 (subjective) な性格のものといえる。その上でなお、話し手は言語化しようとする事態との関連で、一つには自らの身をその事態の中に置くというスタンスで事態把握を行なうか、もう一つには自らの身をその事態の外に置くというスタンスで事態把握を行なうか、という点での選択をなしうる。前者の場合、言語化の対象とされるはずの客体としての事態の中に主体としての話し手が自らをのめり込ませているという意味で、主観的／主体的な事態把握 (subjective construal) と言われる。(514)

主観的事態把握 話者は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように、体験的に事態把握をする（自己投入）。

客観的事態把握 話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は——自分の分身をその事態の中に残したまま——自らはその事態から抜け出し、事態の外に身をおいて、傍観者ないし観察者として、客観的に——自己を含む——事態を把握する（自己分裂）。

(Cf. 池上 2003, 2004)

- (4) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。(川端康成「雪国」)
b. The train came out of the long tunnel into the snow country. (E. G. Seidensticker 訳)
c. Als der Zug aus dem langen Grenztunnel herauskroch, lag das „Schneeland“ vor ihm weit ausgebreitet. (O. Benl 訳)
d. Jenseits des Tunnels erschien das Schneeland. (T. Cheung 訳)

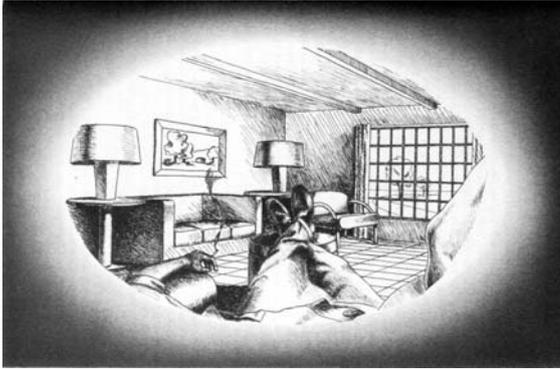
【参考】

- (4) c. Als der Zug aus dem langen Grenztunnel **herauskroch**, lag das „Schneeland“ vor ihm weit ausgebreitet.
e. Als der Zug aus dem langen Grenztunnel **hinauskroch**, lag das „Schneeland“ vor ihm weit ausgebreitet.

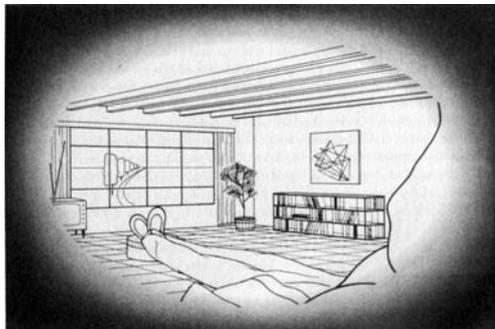
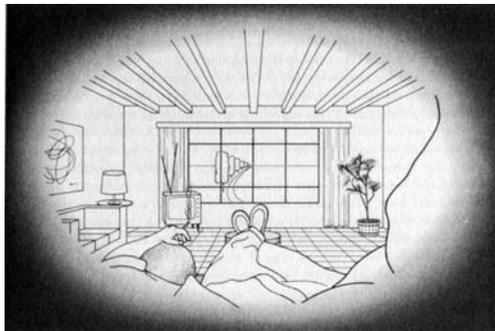
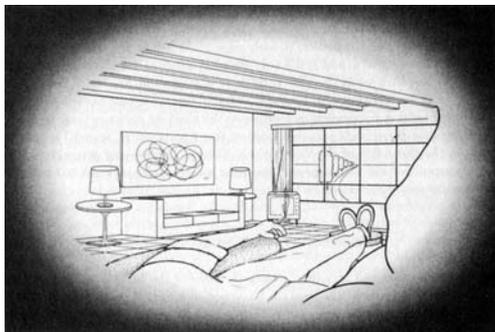
→ 母語話者には差異は感じられないとのこと

- (4) c. Als der Zug aus dem langen Grenztunnel herauskroch, lag das „Schneeland“ **vor ihm** weit ausgebreitet.
f. Als der Zug aus dem langen Grenztunnel herauskroch, lag das „Schneeland“ φ weit ausgebreitet.
g. Als der Zug aus dem langen Grenztunnel herauskroch, lag das „Schneeland“ im Nebel.
h. Als der Zug aus dem langen Grenztunnel herauskroch, lag das „Schneeland“ noch in weiter Ferne.

【参考】



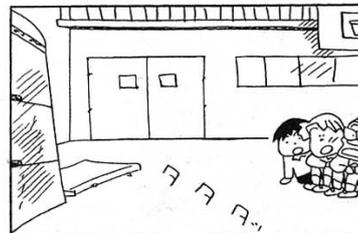
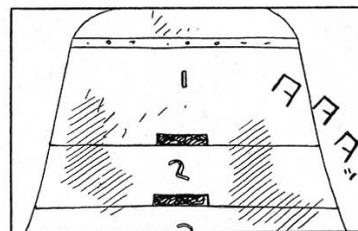
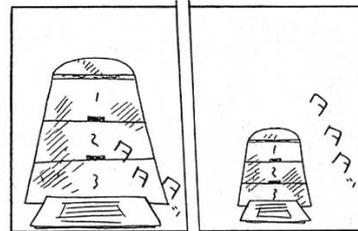
Gibson (1986: 113)



A sequence of overlapping fields of view obtained by turning the head to the right.
Aus: Gibson (1986: 118f.)

のちん

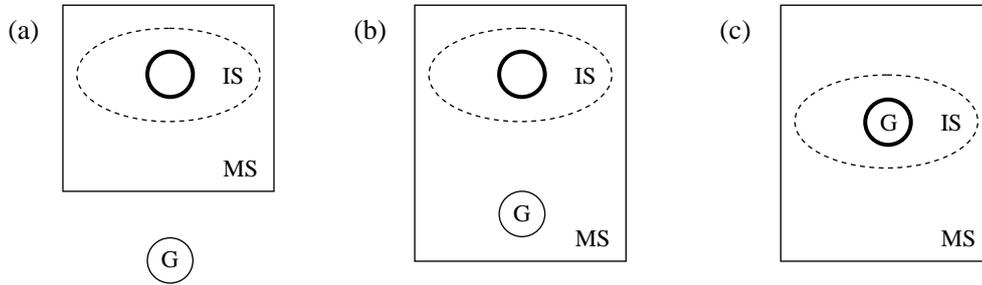
3118



朝日新聞

主観化と客観化

Langacker の「主観化」(Subjectification)



【図 1】 Langacker (1990: 10)

G = ground: 発話の基盤となる要素 (「話し手」を含む)

MS = maximal scope: 最大スコープ (舞台全体, 舞台袖含む)

IS = immediate scope (onstage region): 直接スコープ (照明の当たる部分)

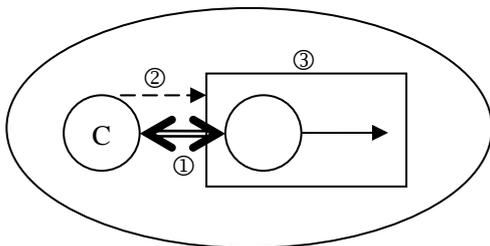
太線: profiling

最適観察構図 (optimal viewing arrangement) → 主観化 (subjectification)

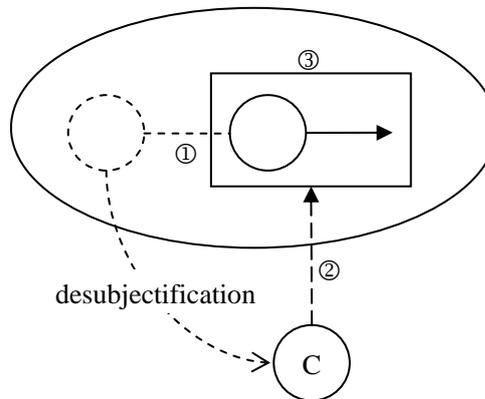
- (5) a. Vanessa is sitting across the table from Veronica.
- b. Vanessa is sitting across the table.
- c. Vanessa is sitting across the table from me. — Langacker (1990: 17ff.)

中村 (2004) の I モードと D モード → 脱主観化 (desubjectification)

Interaction mode of Cognition (I-mode)



Displaced mode of cognition (D-mode)



楕円: Domain of cognition, context, or environment

C: Conceptualizer

① Interaction ② Cognitive process ③ Event

【図 2】 中村 (2004: 36f.)

【参考】

‘subjective experiencing self’ vs. ‘objective observing self’ (Lyons 1982)

- (6) a. I remember switching off the light.
b. I remember myself switching off the light. (Lyons 1982: 107)

‘ecological self’ (Neisser 1988)

環境の中に埋め込まれており、環境とともに知覚される自己 (Neisser 1988)。エコロジカル・セルフは視野の中にあるものではなく、これに相当する言語表現の形式はゼロ形 (本多 2005)。

- (7) Kyoto is approaching. (本多 2005: 26)
Cf. We are approaching Kyoto.

事例

感覚表現

- (8) a. 居間の窓からは林と山の稜線が見えた。(村上春樹「ノルウェイの森」)
b. Vom Wohnzimmerfenster aus sah ich [...] die Konturen des Waldes und der Bergkämme.
(U. Gräfe 訳)
- (9) a. Ich hörte, wie sie [...] Hose und Pullover ausschüttelte. (B. Schlink, *Der Vorleser*)
b. 彼女が [...] ズボンやセーターをはたいている音が聞こえた。(松永美穂訳)
- (10) a. ^{まつたかだち}先高館にのぼれば、北上川南部より流るゝ^{たいが}大河也。(芭蕉「おくのほそ道」)
b. Wir stiegen zuerst auf den Takadachi-Hügel, wo wir den Kitakami-Fluß betrachten konnten, der aus der nördlich gelegenen Nambu-Gegend kommt. (G. S. Dombrady 訳)

存在・所有表現

- (11) a. 「今時間はある？」「時間があります」と僕は言う。(村上春樹「海辺のカフカ」)
b. „Hast du einen Moment Zeit?“ „Ja, natürlich“, sage ich. (U. Gräfe 訳)
- (12) a. 「きまった恋人がいるの？」「きまった恋人はいない」と私は言った。(村上春樹「世界の終りとハードボイルト・ワンダーランド」)
b. „Oder hast du eine feste Freundin?“ „Ich habe keine feste Freundin“, sagte ich. (A. Ortsmanns/J. Stalph 訳)

所在地への言及

- (13) a. ここはいったいどこなのだろう？ (村上春樹「アフターダーク」)
b. Wo bin ich hier überhaupt? (U. Gräfe 訳)
- (14) a. 「ここはどこ？」と直子が [...] 訊ねた。(村上「ノルウェイ」)
b. „Wo sind wir hier?“ fragte Naoko. (Gräfe)

独り言

- (15) a. [Er] fügte hinzu: „Mir scheint, du faselst und bist nicht ganz klar im Kopf.“ (Th. Mann, *Zauberberg*)
b. [彼は] 付け加えた。「うわ言をいったりして、頭がはっきりしていないような気がする」(高橋義孝訳)
- (16) a. あーいかんいかん、きのう失恋したばかりだというのに… (高橋留美子「めぞん一刻」)
b. So ein Quatsch!! Wo du gerade eine unglückliche Liebe hinter dir hast! (C. Caspary 訳)

再帰代名詞

- (17) a. Ich wusch mich. (Schlink, *Vorleser*)
b. ぼくは体を洗った。(松永)
- (18) a. Sie hatte sich bei Tagesanbruch erhängt. (Schlink, *Vorleser*)
b. 夜が明けるころに首を吊ったのだ。(松永)

【参考】

sich waschen (*wash oneself*) 体を洗う / sich wärmen (*warm oneself [up]*) 体を暖める / sich [er]hängen (*hang oneself*) 首をつる / sich umbringen (*kill oneself*) 自殺する / sich rasieren (*shave*) ひげをそる / sich kämmen (*comb one's hair*) 髪をとかす / sich anziehen (*get dressed*) 服を着る / sich ausziehen (*undress or get undressed*) 服を脱ぐ / sich umziehen (*change or get changed*) 服を着替える / [sich] duschen (*take or have a shower*) シャワーを浴びる / vgl. baden (*have or take a bath; bath*) 風呂に入る

直示

- (19) a. そのとき背後で小さな笑い声のようなものが聞こえた。(村上「カフカ」)
b. Auf einmal ertönte hinter ihnen ein leises Lachen. (Gräfe)
- (20) a. [彼女は] こちらに視線を向ける。(村上「カフカ」)
b. [Sie] richtet ihren Blick auf mich. (Gräfe)

【参考】 テクストの構成——前方照応か直示か (田中 2006, 2008)

- (21) a. Hans met Alfons. He had a rain coat on.
b. Hans traf Alfons. Er trug einen Regenmantel.
c. Hans traf Alfons. Der trug einen Regenmantel.
d. ハンスはアルフオンスと会った。彼はレインコートを着ていた。
—— 田中 (2008: 202)

気づきの表現

- (22) a. Eines Abends, da er jenes Zimmer aufsuchte, fand er den strebsamen Lucius dort vor einem Notenpult mit Üben beschäftigt. (H. Hesse, *Unterm Rad*)
b. ある夕方ハイルナーが練習室に行くと、がっちり屋のルチウスが楽譜台の前で練習していた。(高橋健二訳)
- (23) a. ナカタさんが後ろを振り向くと、隣家の低いブロック塀の上に美しい細身のシャム猫が腰掛け [...] (村上「カフカ」)
b. Als Nakata sich umwandte, sah er auf der niedrigen Betonmauer vor dem angrenzenden Haus eine schöne schlanke Siamkatze [...] (Gräfe)

【参考】偶然確定条件 (本多 2005: 190ff.; 豊田 1979 も参照)

- (24) 動物園に行けばパンダがいる。

→ 動物園に行こうが行くまいが、動物園にパンダはいる！
動物園に行く者の「見え」を語る。

- (25) a. 問題はハイヒールだったが、事務所に行けばジョギング・シューズ [...] が置いてあると彼女は言った。(村上「世界の終り」)
b. Ein Problem waren ihre Stöckelschuhe; sie meinte aber, daß im Büro Joggingsschuhe [...] stünden. (Ortsmanns/Stalph)

- (26) Als sie sich umdrehten, saß jemand auf ihrer Picknickdecke [...] (M. Sotke, *Ausgelacht*)
(27) [...] und wie er hinaussah, stand unter seinem Fenster Joachim selbst auf dem Perron (Mann, *Zauberberg*)
窓のそとを見ると、窓の下にヨーアヒムその人が [...] プラットホームに立っていた。(関・望月)

→ ドイツ語では客観読みされている可能性が高い

時制・話法

- (28) Neulich treffe ich einen alten Schulkameraden. 【歴史的現在】
(29) a. Er fragte den Arzt: „Bin ich wirklich so schwer krank?“ 【直接話法】
b. Er fragte den Arzt, ob er wirklich so schwer krank sei. 【間接話法】
c. War er wirklich so schwer krank? 【体験話法】
- Helbig/Buscha (2001: 132f.)¹

¹ Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim (2001): *Deutsche Grammatik*. Berlin: Langenscheidt.

- (30) a. このうちに相違ないが、どこからはいっていいか、勝手口がなかった。(幸田文「流れる」)
- b. Es war zweifelsohne dieses Haus, aber mir war unklar, wie ich hineinkommen sollte, denn es gab keinen Hintereingang.
- c. „Es muß zweifelsohne dieses Haus sein. Wie soll ich da hineinkommen?“ Denn es gab keinen Hintereingang.

→ 時制の切り替え (牧野 1978, 池上 1986, 山岡 2001, 菅沼 2002; 乙政 1985)

→ 日本語における自由直接話法の多用 (三瓶 1996)

【参考】ドイツ語における自由直接話法の例

- (31) Nina überlegte. Hier würde er [= Soso] es wirklich gut haben. Welcher Kater hat schon einen Puppenwagen zum Schlafen? Und wenn Soso hier bleiben durfte, dann konnte sie ja auch heim. Dann war ja alles gut! (G. Pausewang, *Ich geb dir noch eine Chance, Gott!*, 三瓶 2008: 197f. より引用)

ドイツ語における主観的事態把握

主観的移動 = 「見え」の表現

- (32) Stockfinstere Tunnel kamen, und wenn es wieder Tag wurde, taten weitläufige Abgründe mit Ortschaften in der Tiefe sich auf. (Mann, *Zauberberg*)
まっくらいトンネルがいくつもつづき、ふたたび明るくなると、底に部落の見えるひろい谷間がひらけた。(関・望月)
- (33) hier und da kamen Neubauten. (Mann, *Zauberberg*)
ところどころに新築の家も見られた。(高橋)

空間的分布を表す時間表現

- (34) Wir fahren durch Weinberge [...] manchmal gab's einen Steinbruch [...] (Schlink, *Vorleser*)
ぼくたちはブドウが栽培された山あいの道を [...] 走っていた [...] ときどき採石場があり (松永)
- (35) [...] manchmal setzte auch die Bebauung aus [...] (Mann, *Zauberberg*)
ときどき家並みがとぎれ (高橋)

好まれる事態把握

「誰もいない」

金田一 (2007)¹:

先に触れたドイツ人が理屈っぽいことには、「ぼくは昨夜実験室に行ったが誰もいなかった」と言うと、「お前がいたじゃないか」と言うそうだ。ドイツ人はその場合「ぼくは昨夜実験室へ行ったが、そこにはぼく以外には誰もいなかった」と言うのだそうだ。(189)

→ ただし、ネイティブに聞いてみると、どちらでも間違いではないという答え。日本語でも同じ。

(36) ここには**ぼくらの他には誰もいませんよ**、片桐さん。(村上春樹「かえるくん、東京を救う」)

Außer uns ist niemand hier, Herr Katagiri. (Gräfe)

→ しかしながら、それでもなお、事態把握の傾向は異なるのではないか？

(37) a. ^{このみち}此道や^{ゆくひと}行人なしに秋の暮 芭蕉

b. Diesen Weg
geht niemand
an diesem Herbstabend... (D. Krusche 訳)

Krusche (1994)²:

俳句がどれほど具体的であるのかというのは、例えば次のような点からも見て取れる。俳句では、それを語っている人自身についての言及が全くなされないということがよくあるが、それにもかかわらず、その句をきちんと理解するためには、その人がその句の状況の中にも存在していると解さなければならないのである。

芭蕉の俳句、

此道や行人なしに秋の暮

は、一見何の意味もなさそうな俳句の一つである。一本の道が見える。そしてその道について、誰も行く人がいない、と述べられる。まあいいだろう、つまり誰もいないということだな、とでも言いたくなるようなところである。それでよしとしておこうではないか、と。しかしながら、俳句を追体験しながら具体化していくという作業はようやくそこから始まるのである。目の前の道を見て「此道や行人なしに…」と述べているその人はつまり、同時にその道を歩いている人である。その道を「誰もいない道」と認識している自

¹ 金田一春彦 (2007): 「日本語のこころ」日本エッセイスト・クラブ (編)『日本語のこころ』文藝春秋, 187-190.

² Krusche, Dietrich (1994): „Essay. Erläuterungen zu einer fremden literarischen Gattung“. In: *Haiku. Japanische Gedichte*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag, 115-151.

己は、同時に、これこそが自分の道であり、自分にとってはこれが唯一の道であるということを知っている。そしてそれは秋の中で夕暮れへと通じている道なのだ。その道がどのような様子をしており、どこへ向かうのかということを知っている。そしてその道を行かなければならないということも分かっている。それは運命の体験だ。そのことについてこの俳句は述べているのである。(117, 訳は大藪)

今後の方向性・課題

「する」と「なる」の再考

→ より根本にあるのは主観的事態把握ということではないか (Ikegami 2007: Nachwort)

省略現象の再考

→ 敬語や助動詞などの使用も含め (Coulmas 1983), より根本にあるのは主観的事態把握ということではないか (Uehara 1998, Ikegami 2007, Tanaka demn.)

「主観性」の類型論 (上原 2001, 2005, Uehara 2006)

「共同注意」「間主観性」を軸としたテキスト構成の対照研究, など

対照研究におけるより精密な調査と分析

→ 実際には重なり (類似) も大きい, また, 翻訳による調査では対照できない場合もしばしば。客観性を持たせるには?

【参考】「sehen と見る・見える」の調査

B. Schlink, *Der Vorleser* / 松永美穂訳「朗読者」

		総数	見る人などの表示	見える対象の表示
ドイツ語原文	sehen	125	112 (90%)	122 (98%)
日本語訳	見る	115	62 (54%)	100 (87%)
	見える	42	2* (5%)	36 (86%)

*内訳: わたしには (1例), ぼくの目には (1例)

村上春樹「ノルウェイの森」/ U. Gräfe 訳, *Naokos Lächeln*

		総数	見る人などの表示	見える対象の表示
ドイツ語原文	sehen	191	165 (86%)	180 (94%)
日本語訳	見る	263	115 (44%)	200 (76%)
	見える	107	5* (5%)	87 (81%)

*内訳: 僕には (1例), 僕は (1例), 他の人々に [見えないのか] (1例), 目に (2例)

事態把握のずれ

- (38) a. Ich fahre im Auto. Ich sehe rechter Hand das Haus und ...
b. ぼくは車を運転していて、右手にあの家が見える。
- (39) a. Wenn ich das Haus auf dem Land sehe, dauert der Traum länger, ...
b. その家が田舎にあるときは, 夢はもっと長く続く。

→ 一見、きれいに差が出ているように見える、しかし…

語彙・語義のずれ・広がり (→ 巻末資料参照)

sehen, ansehen, aufsehen, blicken, betrachten ... — sehen と「会う」「分かる」 usw. — 「見える」と aussehen, kommen(!) usw. — 「面倒を見る」「夢を見る」「見るからに」 usw.

→ 翻訳の問題を考慮する必要性 (cf. 藤濤 2003, 2005)

ドイツ語と英語の相違についての調査・分析

→ これまでの研究は英語を対象とした先行研究に負うところが大きい。独英間に差異はないのか？

- (40) a. そしてうしろからは, 「旦那あ, 旦那あ,」と叫ぶものがあります。(宮沢賢治「注文の多い料理店」)
b. Von hinten rief jemand laut: „Ihr Herren! Ihr Herren!“ (J. Fischer 訳)
c. [...] behind them someone called, “Gentlemen! Gentlemen!” (J. Bester 訳)
- (41) a. その時ふとうしろを見ますと、立派な一軒の西洋造りの家がありました。(ebd.)
b. Und als sie sich zufällig umsahen, stand da ein prachtvolles Gebäude in europäischem Stil. (ebd.)
c. Just then, one of them happened to look round, and what should he see standing there but a fine brick building. (ebd.)
- (42) a. 二人は戸を押して、なかへ入りました。そこはすぐ廊下になっていました。(ebd.)
b. Die beiden machten die Tür auf und traten ein. Da war gleich ein Korridor [...] (ebd.)
c. They pushed open the door and went through. On the other side was a corridor. (ebd.)
- (43) a. 片桐がアパートの部屋に戻ると、巨大な蛙が待っていた。
b. Als Katagiri in seine Wohnung kam, wartete dort ein riesenhafter Frosch auf ihn. (Gräfe)
c. Katagiri found a giant frog waiting for him in his apartment. (Rubin)

- (44) a. 問題はハイヒールだったが、事務所に行けばジョギング・シューズ [...] が置いてあると彼女は言った。 (= 25)
- b. Ein Problem waren ihre Stöckelschuhe; sie meinte aber, daß im Büro Joggingschuhe [...] stünden. (Ortsmanns/Stalph)
- c. Her high heels presented a problem, but she said she had jogging shoes [...] at the office. (Birnbaum)
- (45) a. Stockfinstere Tunnel kamen, und wenn es wieder Tag wurde, taten weitläufige Abgründe mit Ortschaften in der Tiefe sich auf. (= 32)
- b. There were pitch-black tunnels, and when daylight returned, vast chasms were revealed, with a few villages far below. (J. E. Woods)
- (46) a. [...] hier und da kamen Neubauten. (= 33)
- b. Here and there new buildings were under construction (Woods)

文化・社会への広がり（？）

「聞き手責任」と「話し手責任」(Hinds 1987)

「主客融合」と「主客対立」(Ikegami 2007)

土居健郎：「甘え」

中根千枝：「タテ社会の人間関係」

河合隼雄：「母性社会」と「父性社会」

文献

- Coulmas, Florian (1983): *Japanisch von außen gesehen*. Tokyo: Asahi Verlag.
- 藤濤文子 (2003): 「文学テキストの翻訳にみる異文化コミュニケーション行為——評価分析のための方法」『ドイツ文学』115, 30-42.
- 藤濤文子 (2005): 「日独翻訳にみる異文化コミュニケーション行為——『ノルウェイの森』の独語訳分析」『神戸大学ドイツ文学論集』34, 31-50.
- Gibson, James J. (1979 [1986]): *The Ecological Approach to Visual Perception*. London: Lawrence Erlbaum Associates.
- Haiman, John (1995): *Grammatical Signs of the Divided Self*. In: Abraham, Werner et al. (eds.): *Discourse, Grammar and Typology*. Amsterdam. 213-134.
- Hinds, John (1986): *Situation vs. Person Focus*. Tokyo: Kuroasio.
- Hinds, John (1987): 'Reader Versus Writer Responsibility'. In: Connor, Ulla/Kaplan, Robert B. (eds.): *Writing across Languages*. Reading, MA. 141-152.
- 本多啓 (1994): 「見えない自分, 言えない自分——言語にあらわれた自己知覚」『現代思想』11月号, 168-176.
- 本多啓 (1997): 「世界の知覚と自己知覚」『英語青年』3月号, 658-660.
- 本多啓 (2005): 『アフォーダンスの認知意味論——生態心理学から見た文法現象』東京大学出版会.
- 本多啓 (2005): 「自己の直接知覚としての Subjective Construal」『認知言語学会論文集』5, 515-530.
- 本多啓 (2008): 「動く身体と空間表現——生態心理学からのアプローチ」『言語』7月号, 44-51.
- 本多啓/上原聡/池上嘉彦 (2005): 「Subjective Construal とは何か」『日本認知言語学会論文集』5, 514-557.
- 池上嘉彦 (1981 [2007]): 『<する> と <なる> の言語学——言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店. [Dt. Übers.: *Sprachwissenschaft des Tuns und des Werdens. Typologie der japanischen Sprache und Kultur*. Münster: LIT. 2007]
- 池上嘉彦 (1986): 「日本語の語りのテキストにおける時制の転換について」日本記号学会 (編) 『語り——文化のナラトロジー』東海大学出版会, 61-74.
- Ikegami, Yoshihiko (1991): 'Transitivity and Tense Variation in Narrative Text'. In: Werner Bahner et al. (eds.): *Proceedings of the Fourteenth International Congress of Linguistics. Vol. 3*. Berlin: Akademie-Verlag, 2136-2139.
- 池上嘉彦 (2000 [2007]): 『「日本語論」への招待』講談社. [『日本語と日本語論』筑摩書房. 2007]
- 池上嘉彦 (2003-2004): 「言語における <主観性> と <主観性> の言語的指標 (1)-(2)」山梨正明ほか (編): 『認知言語学論考 No. 3-4』ひつじ書房, 1-49; 1-60.
- Ikegami, Yoshihiko (2004): "First/Second vs. Third Person" and "First vs. Second/Third Person". Two Types of "Linguistic Subjectivity". In: Brisard, Frank et al. (eds.): *Seduction, Community, Speech*. Amsterdam: Benjamins, 61-73.
- Ikegami, Yoshihiko (2005): 'Indices of a "Subjectivity-prominent" Language. Between Cognitive Linguistics and Linguistic Typology'. *Annual Review of Cognitive Linguistics* 3, 132-164.

- Ikegami, Yoshihiko (2005): 'Japanese as Seen from Outside and from Inside'. In: Wlodarczyk, André (ed.): *Paris Lectures in Japanese Linguistics*. Tokyo: Kurosio, 15-25.
- 池上嘉彦 (2005): 「日本語の中の 'Subjective Construal」 『認知言語学会論文集』5, 547-557.
- 池上嘉彦 (2006a): 『英語の感覚・日本語の感覚』 日本放送出版協会.
- 池上嘉彦 (2006b): 「<主観的事態把握> とは何か」 『言語』5月号, 20-27.
- Ikegami, Yoshihiko (2007): 'Subjectivity, Ego-orientation Subject-Object Merger: A Cognitive Account of the Zero-Encoding of the Grammatical Subject in Japanese'. In: Ikegami, Yoshihiko et al. (eds.): *Japanese Linguistics. European Chapter*. Tokyo: Krosio.
- 金谷武洋 (2004): 『英語にも主語はなかった——日本語文法から言語千年史へ』 講談社.
- 岸谷徹子 (1990): 「構文論にとって「話手」とは何か」 『東京大学外国語科研究紀要』38 (1), 47-61.
- Kishitani, Shoko (1991): „Agens, Subjekt und Person. Die drei Ebenen der Hypostasierung in der Satzbildung“. In: Harweg, Roland u.a. (Hg.): *Die deutsche Sprache. Gestalt und Leistung. Hennig Brinkmann in der Diskussion..* Münster: Nodus, 55-84.
- 岸谷徹子 (1996): 「Person (人称) と Subjekt (主語) の関係——言行為の普遍性を求めて」 『ことばを考える3』 あるむ, 47-85.
- 岸谷徹子 (2001): 「言語研究における「話者 (Sprecher)」 の概念について」 『ことばを考える4』 あるむ, 33-52.
- 近藤安月子 (2005): 「「のだ」 が指標する話し手の主観性」 『言語』5月号, 68-73.
- 近藤安月子／姫野伴子 (2007): 「参照点としての「私」と自己中心的な「私」」 『認知言語学会論文集』7, 583-590.
- 久野暉 (1978): 『談話の文法』 大修館書店.
- Langacker, Ronald W. (1985): 'Observations and Speculations on Subjectivity'. In: Haiman, John (ed.): *Iconicity in Syntax*. Amsterdam: Benjamins, 109-150.
- Langacker, Ronald W. (1990): 'Subjectification'. *Cognitive Linguistics* 1, 5-38.
- Lyons, John (1982): 'Deixis and Subjectivity: *Loquor, ergo sum?*' In: Jarvella, R. Robert/Klein, Wolfgang (eds.): *Speech, Place, and Action*. Chichester: John Wiley & Sons, 101-124.
- 牧野成一 (1978): 『ことばと空間』 東海大学出版会.
- 牧野成一 (1983): 「物語の文章における時制の転換」 『言語』12月号, 109-117.
- 三瓶裕文 (1985): 「エンパシーによる日独語の対照分析——主観性の言語的具現をめぐって」 浜崎長寿ほか (編) 『日独語対照研究』 大学書林, 182-195.
- Mikame, Hirofumi (1996): „Markierte Perspektive, perspektive Annäherung des Sprechers an das Objekt und direkte Wahrnehmung“. *Sprachwissenschaft* 21, 367-420.
- 三瓶裕文 (1996): 「日本語とドイツ語の体験話法について——間接話法と自由直接話法の間で」 『一橋論叢』115 (3), 40-60.
- 三瓶裕文 (2008): 「体験話法——作中人物の心情の体験」 三瓶裕文／成田節 (編) 『ドイツ語を考える』 三修社, 191-201.
- 森田良行 (1989): 『日本人の発想, 日本語の表現——「私」の立場がことばを決める』 中央公論社.
- 森田良行 (2006): 『話者の視点がつくる日本語』 ひつじ書房.
- 守屋三千代 (2006): 「<共同注意> と終助詞使用」 『言語』5月号, 62-67.

- 守屋三千代 (2007): 「文章の「語り」と「読み」——〈共同注意〉と〈間主観性〉の観点から」『認知言語学会論文集』7, 591-594.
- 中村芳久 (2004): 「主観性の言語学——主観性と文法構造・構文」中村芳久 (編)『認知文法論 II』大修館書店, 3-51.
- 中村芳久 (2006): 「言語における主観性・客観性の認知メカニズム」『言語』5月号, 74-82.
- 成田節 (1995): 「„Perspektive“ の概念について——構文研究の観点から」『大阪市立大学人文研究』47 (10), 161-177.
- 成田節 (1996): 「ドイツ語と日本語の受動態について——その意味の相違」『ドイツ文学』97, 123-133.
- Neisser, Ulric (1988): 'Five Kinds of Self-knowledge'. *Philosophical Psychology* 1, 35-59.
- 乙政潤 (1985): 「小説における時制の対照」浜崎長寿ほか (編)『日独語対照研究』大学書林, 147-156.
- Ozono, Masahiko (2003): 'Subjektive und objektive Auffassung eines Sachverhalts am Beispiel von Ausdrücken zur Sinneswahrnehmung'. *Neue Beiträge zur Germanistik* 2 (2), 91-100.
- 大藪正彦 (2005): 「「好まれる言い回し」とドイツ語教育——モノ、コト、トコロの把握に見る「ドイツ語らしさ」」『ドイツ文学論集』(日本独文学会中国四国支部) 38, 1-11.
- 大藪正彦 (2006): 「ドイツ語における主観性の諸相」『日本認知言語学会論文集』6, 524-527.
- Ozono, Masahiko (2008): „Wahrnehmung und sprachliche Ausdrücke. Subjektive Auffassung im Deutschen.“ *Journal of the Foreign Language Education Center, Shimane University* 3, 81-95.
- Ozono, Masahiko (demn.): „Subjektive und objektive Auffassung. Zwei Raumauffassungsweisen in kontrastiver Sicht“. *Neue Beiträge zur Germanistik* 7 (1).
- 定延利之 (2002): 「時間から空間へ? ——〈空間的分布を表す時間語彙〉をめぐって」生越直樹 (編)『対照言語学』東京大学出版会, 183-215.
- 菅沼文子 (2002): 「童話における視点の動きの日英対照研究」『JELS』19, 107-115.
- 田中慎 (2006): 「アナファーとダイクスス——指示のタイポロジー」『認知言語学会論文集』6, 532-535.
- 田中慎 (2008): 「代名詞使用から見たドイツ語テキスト構成のしくみ」三瓶裕文/成田節 (編)『ドイツ語を考える』三修社, 202-211.
- Tanaka, Shin (demn.): „Kontra Ellipse. So viel wie nötig, so wenig wie möglich“. *Neue Beiträge zur Germanistik* 7 (1).
- 豊田豊子 (1979): 「発見の「と」」『日本語教育』36, 91-105.
- Uehara, Satoshi (1998): 'Pronoun Drop and Perspective in Japanese'. *Japanese/Korean Linguistics* 7, 275-289.
- 上原聡 (2001): 「言語の主観性に関する認知類型論的一考察」『日本認知言語学会論文集』1, 1-11.
- 上原聡 (2005): 「Subjective Construal と文法構造と言語類型と——日本語の内的状態述語をめぐって」『認知言語学会論文集』5, 531-546.
- Uehara, Satoshi (2006): 'Toward a Typology of Linguistic Subjectivity. A Cognitive and Cross-Linguistic Approach to Grammaticalized Deixis'. In: A. Athanasiadou et al. (eds.): *Subjectification. Various Paths to Subjectivity*. Berlin: de Gruyter, 75-117.
- 山岡實 (2001 [2005]): 『「語り」の記号論——日英比較物語文分析』松柏社. [増補版 2005]

【資料】 sehen と「見る・見える」——冒頭の例

Der Vorleser

	原文	日本語訳	対応
1	Ich <u>sah</u> den Himmel, die Sonne, die Wolken und ...	ぼくは空や太陽や雲を <u>眺め</u> , ...	×
2	[ich] <u>sah</u> auf das Erbrochene zu meinen Füßen und ...	[ぼくは] 足もとの吐瀉物を見ながら...	○
3	Die Frau, die <u>sich</u> meiner <u>annahm</u> , tat es fast grob.	そのとき一人の女性が、ほとんど乱暴といってもいい態度でぼくの面倒を <u>見て</u> くれた。	×
4	Sie richtete sich auf und <u>sah</u> , daß ich weinte.	彼女は体を起こすと、ぼくが泣いているのに <u>気づいた</u> 。	×
5	Immer wieder habe ich in späteren Jahren von dem Haus <u>geträumt</u> .	のちになって、ぼくはくり返し、この家の夢を <u>見た</u> 。	×
6	Ich gehe durch eine fremde Stadt und <u>sehe</u> das Haus.	知らない町を歩いていてこの家を見かける、という夢だ。	×
7	Dann fällt mir ein, daß ich das Haus schon <u>gesehen</u> habe.	それから、 <u>見た</u> ことのある家なんだという考えが浮かんでくるが、...	○
8	Ich bin im Traum zum Beispiel in Rom, <u>sehe</u> da das Haus und ...	たとえば夢の中でぼくはローマにいて、... (訳出なし)	×
9	[ich] erinnere mich, es schon in Bern <u>gesehen</u> zu haben.	あの家はベルンで <u>見た</u> ことがあるのかな、と考えている。	○
10	Wenn ich das Haus auf dem Land <u>sehe</u> , dauert der Traum länger, ...	その家が田舎に <u>ある</u> ときは、夢はもっと長く続く。(知覚動詞なし)	×
11	Ich fahre im Auto. Ich <u>sehe</u> rechter Hand das Haus und ...	ぼくは車を運転していて、右手にあの家が <u>見える</u> 。	?

ノルウェイの森

	原文	ドイツ語訳	対応
1	僕は顔を上げて北海の上空に浮かんだ暗い雲を <u>眺め</u> , ...	[ich] <u>sah</u> aus dem Fenster auf die dunklen Wolken ...	×
2	[空は高く] じっと <u>見ている</u> と目が痛くなるほどだった。	... daß einem die Augen schmerzten, wenn man zu ihm <u>hinaufsa</u> h.	×
3	それは何を見ても何を感じても何を考えても、...	... alles, was ich <u>sah</u> , was ich fühlte, was ich dachte, ...	○
4	しかしその風景の中には人の姿は <u>見えない</u> 。	Aber in dieser Szenerie <u>gibt es</u> keine Menschen. (知覚動詞なし)	×
5	あれほど大事そうに <u>見えた</u> ものは、...	Alles, was mir damals so wichtig <u>schien</u> ...	?
6	いつも相手の目をじっと <u>のぞきこみながら</u> 質問する癖や、...	... ihre Art, einem in die Augen zu <u>sehen</u> , wenn sie eine Frage stellte, ...	×
7	... 僕の目を <u>のぞきこむ</u> 。	... wobei sie mir forschend in die Augen <u>sieht</u> .	○
8	実際に <u>目にした</u> わけではない井戸の姿が、...	Die Gestalt jenes Brunnens, den ich nie mit eigenen Augen <u>gesehen</u> habe, ...	×
9	小さな緑色のトカゲがそんな石のすきまにするするとめぐりこむのが <u>見える</u> 。	Zwischen den Spalten <u>huschen</u> Eidechsen <u>umher</u> . (知覚動詞なし)	×
10	... 何も <u>見えない</u> 。	... kann man nichts <u>erkennen</u> .	×
11	[彼女は] ... 僕の顔を <u>見て</u> , 本当よという風になっこりと微笑んだ。	... <u>sah</u> sie mir wie zur Bestätigung ins Gesicht und lächelte.	○